
36人の共犯者

武庫そうき

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

36人の共犯者

【Nコード】

N9536K

【作者名】

武庫そうき

【あらすじ】

春本佳織を殺した犯人は、このクラスにいます……。区立A中学校でおきた女子生徒殺害事件。事件の関係者を通して明かされる、事件の真相と想像を絶する心の闇。イジメ、引きこもり、クラス崩壊……。恐ろしい悲劇が衝撃のラストへ転がり落ちる。以前、こちらで掲載してた「崩れた教壇」という小説を大幅に改訂、まったく別の話として書き直しました。

序章

ぼくが通っていた警察学校ではこんなことを教えられました。真実を見極めるためには、およそ百の声を聞かなければならない、と。残念ながら、ぼくは人の話を聞くのが苦手です。中学校の教師、高校の教師、ともにぼくには聞き取り能力が乏しいと注意されたことを覚えています。ぼくが警察官を志したのは、15歳のころでした。気が弱く、どちらかというと根暗だった性格が災いし、ぼくはよくカツアゲをされていたのです。そのときに助けてもらった警察官に憧れて、こうしてついに夢を叶えることができました。

警察官になれて、ぼくは少しうかれていたのかもしれませんが。

事件は突然起きました。平和な東京郊外で発生した殺人事件。被害者は14歳の女子中学生。さらに、彼女の通う中学校が事件の現場と聞き、衝撃が走りました。新人だったぼくは、先輩刑事の桂木雪さんとともに事件の捜査に乗り出すことになったのです。右も左も分からないぼくは、ただ桂木さんについていくだけでした。殺人事件と言う響きにすら慣れていない新人と、凍える鬼刑事と呼ばれている桂木さん。足手まといになるのは目に見えていることでした。

事件が起きた区立A中学校。伝統を守りつつ、生徒たちに「自主・自立」のスクールミニマムを教えているという素晴らしい学校と聞きました。周辺住民もA中学校の教育に対する理解は相当深いようです。そんな中学校の校内で殺人事件が起き、世の中に大きな衝撃とともに注目が集まったことは言うまでもありません。閑静な住宅街の中での血生臭い殺人事件は、そこに住む人間の頭を打ちぬくような衝撃を与えたのです。

被害者の女子生徒の名前は春本佳織。2年4組の図書委員で、それほど目立った生徒でもなかったらしいのです。事件後、2年4組のクラス担任が変わったと聞きました。本当かどうかは知りませんが、前任の担任の先生が産休を取ったそうです。

事件のせいで、学校でも全校集会や臨時休校が続きました。生徒の動揺、教師はその言葉だけを敏感に感じ取り、至急そのような措置を取ったのです。そのおかげで我々も捜査がしやすくなりました。

「自主・自立」を掲げる中学校で起きた女子生徒殺害事件。

セミが次々と倒れる、9月の始まりのことでした。

第1章 新米教師 1

汗が止まらなくなった。こうして見てみると、自分が赴任した中学校の大きさを実感する。およそ600人はいるのである。体育館の前で話すなど、こうして教師という職業に就かなければ体験できないだろう。ざわざわする体育館の中で、彼らの声をかき消す大きな声が聞こえた。

「静かにしなさい」

担当することになった2年生の学年主任の声だ。園田亜希子。彼女の評判は聞いている。なんでも、彼女の担当する社会科の授業はかたい沈黙に包まれているらしい。鬼教師という言葉も合わない、恐い先生のような。教師間でもあまりいい評判は聞いていない。几帳面で気が強い。そのせいで2年生の教師たちは翻弄されているらしい。

園田先生はぼくにマイクを渡し、目で合図を送った。

「ねえ、カッコよくない？」

「分かる。けっこういい感じ」

小声で話す女子生徒。そんなことを聞くと、なんだかたまらなく恥ずかしくなる。

チラッと園田先生を見ると、早く挨拶をしろとばかりに睨みつける。乾ききった声でぼくは挨拶を始めた。

「おはようございます。今日からこちらの中学校でお世話になります、新任の橋田友哉です。前任の先生が産休を取られたということで、今回2年4組の担任をすることになりました」

2年4組の列だろうか。またざわつき始める。

「教科は数学です。分からないことがたくさんなので、よろしくお

願います」

頭を下げた瞬間、まばらな拍手が聞こえてきた。歓迎されているのかどうかはよく分からない。しかし、もはやそんなことを気にしている場合ではない。教師となったからには、生徒にとつて新人などということは言い訳にならない。教師とはそういう仕事だ。他人の人生に少なからず影響を与える。親でも兄弟でもない赤の他人が、こうして誰かの人生に影響を与える。だから教師という職業が、聖職と呼ばれているのかもしれない。

こうして着任式が終わり、生徒たちは自分たちの教室へ戻っていた。

職員室では教師たちによって職員会議が開かれていた。それぞれの学年団は学年主任の司会でそれぞれの議題で話し合いをする。その部分は教育実習で訪れた中学校と変わらない。ただし、決定的に違うところがあった。誰一人として会議で発言しないのだ。連絡事項のようで、まったく意見の交わりがない。

「みなさん、意見はありませか？」

園田先生のその発言が、会議の終わりを告げる合図らしい。ぼくの周りから人々が離れて行った。ぼくは慌てて、その影を追いかける。

ぼくの前を足早に歩いているのが、2年5組担任の大口あや先生。彼女はぼくが存在を気にもとめず、颯爽と歩いている。

「いつも、会議はあんな感じなんですか？」

「そうだけど、なにか不思議？ 園田先生が学年主任になってから、誰も何も言わなくなったの」

「そうなんですか……」

「そういえば、橋田先生は2年4組の担任でしたよね？」

ぼくは首を縦に動かして、頷いた。

「はい」

「新人のあなたがあのクラスの担任なんて、園田先生も何考えてる

んでしょうね」

「どういう意味ですか？」

大口先生は口元にうすら笑いを浮かべた。

「いいえ……別に」

彼女の歩調が再び速くなった。何かの予言なのか、とにかく気味が悪い。ぼくは動悸を抑えながらやつとのこととで階段をのぼりつめ、2年4組の教室の前で立ち止まった。生徒の気配はたしかにあるが、教室の電気がついていない。この教室だけ電気がついていないので、とても異様に感じられた。

ぼくは不審に思いながら、教室の扉を開いた。

立ち上がっている男子はクラスのお調子者だろうか。プリントを丸めてボールにし、もう一人のお調子者を思われる男子に投げつけた。おしゃべりな女子も立ち上がり、仲のいいグループにかたまっておしゃべりに花を咲かせている。

ぼくは少しホツとした。なんだ、普通の生徒じゃないか。

ぼくが教卓の前に立つと、自然と立ち上がっていた生徒たちが自分の席へ戻っていく。教室は落ち着かないざわめきに満ちていた。新しい教師に興奮しているのだろう。

「はい、静かに」

自分の名前を黒板に書くと、生徒たちの様子が分からなくなっ少し不安になった。

はじめまして。今日からこのクラスの担任をすることになりました、橋田友哉といいます。教科は数学を担当します。みんなの顔と名前を早く覚えたいので、なんでもいいので話しかけてください。よろしく願います。

せんせい、質問していいですか？

いいですよ。でも、全部は答えられないと思うけど……。

先生って何歳ですか？ 新人なのは知ってるけど。

今年で25歳です。君たちとは、ほとんど10歳しか変わらないね。

すっげえ！！先生若い！！

君たちの方がずっと若いよ。

それじゃあ、先生、彼女はいるの？

いいえ。残念だけどもいません。ぼくはね、全然モテないんですよ。よく言いますよね、人生には3回モテ期があるって。ぼくは全然信じていません。

ホントに！？先生けっこうカッコいいのに。

ありがとう。なんだか……そんなこと言われると照れくさいね。

ウチの学校の先生はけっこう美人が多いけど、みんな気が強いからおススメはしないなあ。

大丈夫。もういい大人なんだから、彼女くらい自分で探します。

このクラスでも、けっこうカップルがいるんですよ。

バカ！！何言ってるんだよ。ホント、なんで女子って口軽いわけ？

別に、ホントのこと言ってるだけじゃん。先生何も知らないんだし、クラスのこと教えるのは当然じゃない？

誰が誰と付き合ってるまでは言う必要ねーじゃん。お前、彼氏いないからひがんでんだろ？

はいはい、落ち着いて。

先生、女子の言うことなんて気にしないでいいって。

ここのクラスは男女で仲が悪いのかな？

いいや、別にそんなんじゃないよ。体育祭だって優勝したし、ちなみに打ち上げもした。

ケンカするほど仲がいいってやつ？

そうか、そうだったらいいんだ。安心したよ。

体育祭なんて、男子より女子の方が大活躍だもん。男の立場ないよな。

先生も女子にいじめられないように気をつけて。先生若いし、力ツコいいから。

ハハハ……分かった、気をつけます。

あとからぼくは気づく。これほど会話があるクラスもまた、異常であるのだと。

ぼくが区立A中学校への赴任が決まったのは、世間を震撼させたあの事件のあとのことだ。9月4日の午前7時ごろ、朝練習をしていた陸上部の女子生徒2名が体育倉庫に陸上器具を取りに行ったところ、圧迫により窒息死した女子生徒、春本佳織の遺体を発見した。事件は殺人事件へと発展。たちまち、区立A中学校は日本中が注目する学校になったのだ。

そして、殺された春本佳織という生徒は、ぼくが担任を任された2年4組の生徒だったということも、ぼくの悩みの種のひとつであった。しかし、ぼくの心配とは裏腹に、2年4組の生徒は先ほどのような様子である。拍子抜けした思いだった。

結局、犯人は未だ逮捕されることもなく、事件は捜査中である。事件当初は侵入者による犯行という説が主であったが、捜査を進めるうちに、学校内部の犯行という説も疑われ始めた。事件の担当刑事が何度も学校に足を運び、教師や生徒、学校職員に至るまで聞き込みをしたが、結局犯人は見つからないまま。事件は迷走を極めていくそうだ。

学校内で起きた殺人事件というショッキングなニュースは、連日のように流れていた。世間に投げかけた波紋は大きかった。学校の管理責任や、教師と学校の教育体勢までもが批判の対象となり、閑静な住宅街に臨むA中学校では、毎日のように嫌がらせの電話やマナーを知らない取材陣の大群が押し寄せたらしい。

今でもようやく落ち着きを取り戻したようだが、誰一人として事件を忘れたわけではない。何しろ、犯人がまだ捕まっていないから当然である。ぼくは赴任したばかりの新任教師だが、あの事件がこの学校に遺した傷跡は、計り知れないほど大きいということは分かる。しかし、分からないのは生徒たちだ。あれはから元気なのか。それとも、本当にクラスメイトの死を受け流しているだけなのか。

彼らの表情から、真実が読み取れない。

しかし、なぜ中学2年生の女の子が、誰かの手によって殺められるという悲劇が起こってしまったのか。怨恨による殺人とは考えにくい。彼女が殺される理由というのが、まったく見当たらないのだ。誰もが真っ先につまずき、疑問に思ったことだろう。どうして、中学2年生の女の子が殺されなければならなかったのか。いくら正当そうな答えを探しても、ろくな答えは見つからない。猟奇的な殺人鬼に殺されたと言えばそれまでだが、この事件の闇に誰もが気付いているからこそ、その説が否定されるのだ。

2年4組の担任になると知ってから、ぼくはそんなことばかりを考えていた。

2年4組の教室の電気をつけた。すると、案外この教室が狭いことに気がついた。教室の後方にある黒板には、学年通信が貼られていたり、委員会からの連絡などが書き込まれている。1か月後に控えた文化祭の準備のため、文化委員会が盛んに行われているらしい。2年4組の出し物は創作ダンス。もう練習は始まっているようだ。創作ダンスの中心となっている生徒は、先ほどのホームルームでも目立っている生徒だった。

文化祭と言えば、リーダーの資質が問われる一番の行事だ。その行事に乗れた生徒は、その後のクラスでの立ち位置が素晴らしくいいものになる。しかし、その逆ならば、その生徒の立場はどんどん狭く、苦しいものになっていくのだ。よく生徒たちは、文化祭をきっかけにクラスが楽しくなったという。およそ過半数はそうだろう。しかし、文化祭がきっかけでクラスの雰囲気が一変してしまうこともあるのだ。

生徒たちにとって文化祭は、ボロボロのつり橋を渡るようなものだ。向こう側へ行くために、必ず渡らなければならない。ごく少数は、そのつり橋を渡りそこね、真っ逆さまに転落していくのだ。こ

のクラスにはリーダーの資質を持った生徒が、すでに華を咲かせているようだ。とりあえず安心はできるが、14歳という微妙な年齢であるから何が起こるかは分からない。教師という立場になり、文化祭という行事がただ楽しい娯楽ではないということを改めて痛感した。2学期の中ごろ、ちょうど1年間の中間にあたる大きな行事だ。多かれ少なかれ、クラスに影響を与えることは確実である。

薄暗い教室に立ち、教師になりたての自分が何を考えているのかと、ふとおかしく思えた。重大な事件の後、この学校は必死に再生しようとしている。来月に開かれる歴代最高予算の文化祭は、それを最も象徴としているのだろう。ぼくはこのクラスを任せられ、このクラスとともにある。この教室にいる36人とともに。その覚悟はできているつもりだ。

「何をしていますのですか？」

突然聞こえてきた声に驚き、振り返るとそこには園田先生がいた。

「あ……園田先生」

「生徒たちはもう下校しているか、クラブ活動に行っています。生徒をお探しなら、放送をお使ください」

「いいえ、別に違うんです。少し不安でしたけど、いい雰囲気のクラスでよかったですと思いまして……」

「あら……そうだったんですか？」

「ホームルームもすぐく賑やかで、あの事件のことなんてもう忘れたみたいでした」

園田先生は小さく笑う。ぼくと同じように教室をぐるりと見渡して、口元に笑みを浮かべたままぼくを一直線に見つめた。

「本当にそんなこと思っているんですか？」

「えっ？」

「あの事件を忘れる？ そんなことあり得ません。自分と同じ教室にいたクラスメイトが、ある日学校で殺されたんです。彼らがどう思っ、なにを考えているのか、私たち教師には計り知れませんが、彼女の言うことはまっとうで、ぼくには反論の余地がなかった。

ぼくの考えが甘いのだろうか。やはり生徒たちは、未だに事件をシヨックに思っ……。

「園田先生、殺された春本佳織についてきいてもよろしいですか？」
ぼくの言葉に園田先生は小さく笑う。今度のこの笑みは、先ほどの嘲りではなく、喜びに近い。

「やつと、きいてくれましたね。ずっと待っていました、あなたがあの事件について尋ねてくるのを」

「でも……あの事件は、この学校の大きな傷です。それをほじくり返すようなこと……」

「そうだとすると、春本佳織について何も尋ねてこないあなたに、わたしは少々失望していました。腫れ物にでも触るようで、まるで現実から逃げている臆病者……そう思っていました」

臆病者。ぼくは今まで、その言葉をよく耳にした。振り返ればぼくの辿ってきた道のりは、歩きやすいアスファルトの道だったように思える。両親に囲まれ、一人っ子だから大事に扱われ、エスカレーター式の私立小学校から大学まで。受験勉強というものも経験したことがなく、挫折もなければ涙もなかった。自分を大切にし、傷つけないように生きてきたのだ。

傷つかないように生きるがために、傷つけたものも多い。

両親は職場結婚の教師だった。父は理科、母は国語の教師。ともに同僚の教師で、秘密裏の恋愛の果てに結婚。ぼくが母のお腹に宿ったことがきっかけで、父はついに、結婚に踏み切ったらしい。

結婚出産後、母は教師を辞め、専業主婦になった。両親は教育のプロだ。誰も、父でさえ、母の子育てに口を出すことはなかった。しかし、それは大きな間違いだったのだ。母が父に隠していた秘密。実は、母は不妊症に悩んでいて、父にはそれを付き合っていた当初から秘密にしていた。ぼくを妊娠したと知り、母は天上の幸せだったらしい。

それが災いし、母の教育は失敗した。できないと思っていた子ども。ぼくが生まれたことが嬉しくて、母はぼくに何でも与えた。小さい頃のぼくは、どんなわがママを言っても聞いてくれることが嬉しくて、それに甘えていた。そもそも、学校における教育と、子育ての教育はまったくの別物である。それを一緒にたに考えていた父も、その周囲の大人たちも、母が誤った道を歩んでしまった起因のひとつであろう。

母は自身の経験から、公立学校にまつわる様々な諸問題を知っていたから、ぼくをエスカレーター式の私立小学校へ入学させた。父も母の方針を受け、それを承諾したのだ。

辛いことなど、何もなかったのかもしれない。母親が決めた道の上を歩くのは、とても安全で歩きやすい。先生に怒られたら、母がわざわざ学校まできてぼくの味方をした。どれだけぼくが悪くても、母は決してぼくを叱ろうとはしなかったのだ。

小学校も高学年になれば、いよいよ母の愛情がただの愛ではないことに気付き始めた。どうして母はぼくを叱らないのか。だんだん、ぼくの中での母が崩れ始めていた。彼女がぼくに抱いている愛情と

は、果たしてどういうものなのだろうか。

中学へ進学しても、母の愚行は衰えることを知らなかった。むしろ、余計にひどくなったように思えた。野球部に所属していたぼくがスタメンに入らなければ、当然のごとく学校へ乗り込む。文化祭では、ぼくを演劇の主役にするまで学校へ通いつめた。完全なモンスターペアレントである。当時はそのような言葉も一般的ではなかったから、単なる親バカと称されていた。

言葉通り、母はモンスターだ。ぼくにまわりつく母の愛情は、もはや愛ではなく、ただの執着のように思えた。家庭におさまリ、教師というやりがいのある仕事を捨て、専業主婦としての友達もない退屈な毎日。彼女が覚えたことは、子どもを大切にすること。かすり傷すらつけず、自分の手の中に入れておきたいという執着心。本来は素直で純粋な愛情だったかもしれないが、それはもはや原形をとどめていないくらい歪んでしまった。中学2年生のぼくは、異常な母の行動を目にし、彼女の愛情がもはや愛情ではないことに気がついてしまったのだ。それと同時に、ぼくはたった一人の味方だった母を失ってしまった。大きな孤独感とともに、母への愛憎は日に日に強くなっていった。

このドロドロした感情をどこにぶつけばいいのか。ぼくは考えた末に、弱者を攻撃するという行動に手を染めてしまった。

最初は、学校の行き道にある家の犬だった。軽く蹴つてやると、低い声で威嚇してくる。それが面白くなくて少し力を入れて蹴ると、不思議なことに、犬は少しせき込むのだ。犬を蹴りながら覚えたのは、犬がぐったりする直前でとめるということ。あまり派手にやっしてしまうといけない。犬が苦しそうにせき込む姿を見て、ぼくは少し笑うのだ。

ぼくのせいなのか、犬が死んだあとに見出したゲームは、学校で飼っていたニワトリがターゲットだった。インターネットで簡単に買った塩酸を、ニワトリの羽に少しかける。ジュワっという音と

もに、ニワトリの生々しい悲鳴が聞こえるのだ。それは少し、人間の悲鳴と似ているような気がした。飼育係になったのは、誰にも見られずにゲームを行うためだ。週3回、ぼくは飼育係の仕事が楽しみでしかたなかった。もう一人の飼育係の仕事も代行で引き受けた。もともと、フンや異臭などで迷惑を被っていた生徒からすれば、飼育しているニワトリに特別な感情を抱くわけがなかった。冗談で、早く食べてしまおうという生徒もいたくらいだ。したがって、ぼくの行為に気付く者はまったく皆無だった。

教室でのぼくはいたって普通だった。特別目立つわけでもなく、無口で孤立しているわけでもない。しっかりとした友達のグループに所属し、少しひょうきん者。授業でも手を挙げるようにしていたから、先生からの信望もよかった。普通に明るい、ムードメーカーまでは言わないが、そこそこ友達も多い男子。よくいるタイプの男子生徒だ。

そんな仮面をかぶっていることにも安心をおぼえてしまい、ぼくはあの怪物と一緒にいても精神の均衡を保てていた。

そんなある日、とうとうぼくの行動がある生徒に知られてしまった。飼育委員でもないのに、その男子生徒はニワトリの世話を親身に行っていたらしい。名前は大澤。クラスでも目立たず、無口で孤立している。言ってしまうえば、クラスのぼくとは正反対の人間だ。そんな大澤に放課後呼び出され、ぼくのしていることを問い詰められたのだ。

大澤はニワトリ小屋の前で、ボロボロになったニワトリの羽を指差して言った。

「お前だろ？ クックをいじめてんのは」

クック。ニワトリの名前だ。誰にも愛されず、義務として機械的に育てられている哀れなニワトリにつけられた、面白味のない名前。クック、このニワトリをそう呼んでいる生徒を、ぼくは初めて見た。それが面白くて、こいつにはぼくの全てをぶつけてもいい、そんな風に思えた。

「クック……か。ハハッ！！ おもしれー、お前」

大澤は仮面をはずしたぼくを見つめた。その目は驚きもせず、怒りもしない、まるで哀れんでいるような、そんな視線だった。

「何がおもしろいんだよ……」

「お前だよ！！ 友達がいねーんだろ？ そんなきたねーニワトリしか、友達がいねーんだよな？ アハハッ！！」

「お前、狂ってるよ」

その目が語りかけているのは、もはや哀れみでもない。慄然とした呆れだ。ぼくの姿を見て、呆れているのだ。そんなこと当たり前なのに、そのときのぼくにはひどい屈辱だった。蔑まれ、呆れられている。今まで感じたことのない視線。母の後ろに隠れて生きてきたぼくには、今までその視線を肌で感じることはなかったのだ。こんなときでさえ、母の呪縛はぼくにまとわりついている。

「オレがお前の友達になつてやる」

こうして大澤は、ぼくのゲームの友達になった。

仮面を外すと、不思議と体が軽くなった。母の歪んだ愛から逃れる最後のゲーム。それは大澤イジメだった。ぼくの心を覗きこんだ他の生徒は、ぼくをどう考えるだろうか。ぼくが反対に、クラスからの排他を受けてしまうのかもしれない。

しかし、ぼくの不安とは裏腹に、他の生徒もぼくに便乗し、大澤イジメが本格化したのだ。もともとクラスに馴染めていなかったから、余計に彼をいじめやすかったのかもしれない。今になって思うが、彼らもまた、ぼくのように心に植えつけられた闇を持て余していたのかもしれない。

犬、ニワトリ、最後はニワトリをかばった人間。ぼくのゲームはいよいよクライマックスに入っていたのだ。女子も含んだ、クラスメイト全員による陰湿なイジメ。全員が共犯者だから、もちろん教師も気がつかない。完璧なゲームであり、何よりもクラスメイトとの一体感を感じられた。今までの冷たい孤独感とは違う、とてもあ

たたかい一体感。

大澤の手足を縛り付けて掃除道具箱に閉じ込めると、彼は恐怖のあまり失神し、小便を漏らしていた。彼の給食はゴミだらけで、とても食べられるものではなかった。ニワトリと同じように、ぼくは大澤の腕や背中に塩酸を垂らした。すると、ニワトリとは全く違った、生の人間の悲鳴が轟いた。彼の皮膚はただれ、痛々しい悲鳴は誰かの手によってさえぎられる。彼が痛みを訴えることすら、ぼくたちは禁止した。

ぼくはようやく、自分の居場所を見いだせたような気がした。大澤という存在を軸に、ぼくたちは結束を強くしたのだ。心の穴を埋め合うように、イジメを通して互いの心の穴を覗いているようだった。彼らはぼくにとつての仲間であり、同士だ。異常な繋がりであることは認識している。しかし、それ以外にぼくには、他者との繋がりを見いだせないでいたのだ。

結局、ぼくが覚えた自分を守る方法は、弱者を攻撃するということとだった。傷つきたくないから、母という存在から逃避するため、いろいろ理屈をつけてみたが、大澤をいじめているときの感情とどれもしっくりしない。それをするしかないのだ。理屈では片づけられない何かが、ぼくを突き動かしている。

そして、ある日。大澤は死んだ。

園田先生はぼくを見つめて、奥の方の座席を指差した。

「あそこが、春本佳織の席でした。今でも残してあります」

「出席簿にも名前があつて、驚きました」

「誰も忘れてなんかいません。生徒はこの教室に入り、あの席を見るたびに思い出します。春本佳織は殺された」と

ぼくは春本佳織のことを触れないでいようとしていた。それはどこかで、大澤と彼女をだぶらせていたからかもしれない。中学2年生という時期で同級生の死を体験した彼らも、この先なるべく事件に触れずにいようと思えるのだろう。

「春本佳織は、たしかにあまり目立たない生徒でした。1年生のころまでは普通の女の子でしたが、変わったのは2年生に入ってからです。授業での発言も少なくなり、友達も少なくなったようです。何があつたのかは知りませんが」

春本佳織はやはり、大澤に似ている。そんな気がしていたから、ぼくは彼女の事件を知ろうとは思わなかった。彼女は大澤の亡霊なのか。中学2年生だったあのころから、大澤はぼくに復讐しようとしているのだろうか。

「橋田先生、あなたに聞いておきたいことがあります」

園田先生ははつきりとした口調でそう言った。最初から、これが言いたかったことのようにだ。園田先生は古びた新聞記事をぼくに見せつけた。

「11年前、某有名私立中学校でおきた男子生徒のイジメ自殺事件」
ぼくは愕然とした。その新聞記事は、ちょうど11年前、ぼくの通う中学校に激震が走ったところだった。

「どうして……それを？」

「失礼かもしれませんが、調べさせてもらいました。イジメが原因

で自殺したこの大澤という生徒は、あなたのクラスメイトだったそうじゃありませんか」

「園田先生……知っていたんですか？」

園田先生は頷き、新聞記事をしまいこんだ。

「春本佳織が殺され、2年4組の前担任は逃げるように退職しました。公式では産休ということになっていますが、あんなのはウソです。後任の先生を採用する際に、わたしはあなたの過去を知り、校長先生を説得して2年4組の担任に抜擢しました」

「どうしてですか？　ぼくは、11年前の事件の当事者で、そもそも教師になるべき人間じゃない」

「あなたにしかできないことです。気づきませんでした？　このクラスはすごく普通です。あなたの経験が生かされる場所じゃないですか」

園田先生は皮肉っぽく笑い、それだけを言い残して去って行った。すごく普通……なんて皮肉な言葉なのだろうと思った。

その夜、ぼくは学校にいているパソコンを自宅へ持って帰った。その中には2年4組の生徒の顔と名前がすべて記録されている。ぼくは風呂に入ったあと、昔はこうやって小テスト勉強をしたものだと回想しながら、生徒の顔と名前を覚える勉強を始めた。こうして夜中に勉強をしていると、母がいつも夜食を持ってきてくれたことを思い出す。

事件から数か月後、母は首を吊った。ぼくは学校から帰宅し、第一発見者となった。リビングで父の使っているネクタイで、誰の手を借りることもなく自らの命を絶った。ドラマなどでよくある首つり自殺の死体とはまるで違い、母の死体はとても汚いものだった。口や鼻から液体が出ていて、目はむき出しで飛び出しかけている。汚いものも垂れ流しになっていて、これが人の死ぬ瞬間なのだと、ぼくは気持ち悪くなりトイレの中で吐いた。もともと美人だった彼

女も、自分の最期がこのような醜い姿になっているとは想像もしなかったはずだ。美しく、冷たく死にたかったのだらうに、首つり自殺という手法を選んだところが、母の滑稽さをよく表しているような気がした。

ぼくは母の死体を見て、安心した。

事件後、母は外出ができなくらいに追い詰められていた。ぼくのしていたことを知り、精神が崩壊していたそうだ。父は相変わらず学校に出かけ、教鞭を取っていたらしい。事件の報道は実名が載らないせいで、普通に仕事を続けられたという。ぼくの学校も事件を大っぴらにしなくなかったから、イジメ加害者側の処分もとても軽いものだった。

ぼくはこうした事件のあと、いつものように母がぼくを守り、なぐさめてくれるのだらうと思っていた。しかし、それは大きな間違이었다。ぼくの過ちを知った母は、ぼくを恐怖で満ちた目で見つめ、事件前の母とはまるで別人になっていた。

ぼくは自分が母をどう思っていたのか、分からなくなった。憎く感じていたのか。いや、それは違う。ぼくは母のことが好きだったのだ。しかし、彼女の愛情にも似つかない執着が大きすぎて、どうすればいいのか分からなかったのだ。ぼくは自分が母のことを好きだったことを、彼女に突き放されてから初めて思い知った。

もう一度、愛してほしい。執着であつてもいい。ぼくはその一心で、彼女がぼくを愛する方法を考えた。

そしてぼくは、ある行動に出たのだ。ぼくは自分の母親がどういう人間なのかを、マスコミにあてて匿名で告発した。とんでもなく息子を溺愛していて、異常な母親なのだと。その後、母の精神はさらに壊れた。

おそらくぼくの行動が、母を死に追いやった原因なのだらう。母の固まった姿を見て、はじめて母がぼくだけのものになったような気がした。それに安堵感を覚えたぼくは、しばらく警察に通報せず、宙に浮く彼女を眺め続けていた。

ぼくは2年4組の教室の前で、息を整えた。大丈夫、昨日の勉強の成果が表れるはずだ。だいたい、生徒の顔と名前は一致するようになった。

教室に入ると、委員長の女の子が号令をかけた。水川理恵。成績優秀で友達も多い。来年度の生徒会長の候補に名前が挙がっているらしい。

「おはようございます。座ってください」

素直に起立、礼をする生徒。やはり、普通のクラスだ。

「今日は1時間目から、文化祭の出し物についての話し合いになっています。このクラスは創作ダンスなんだよね？」

「そうだけど……もうほとんど決まってるし、今さら話し合うこともないよな？」

みんなに同意を要求したのは金村春人。彼は創作ダンスの中心となっている生徒だ。水川と同様に活発で、行事では積極的にクラスを引っ張る存在だ。

「そうか……それじゃあ、どうしようか？」

「ダンスの練習でいいんじゃない？ ちょっとうるさくなるから、他のクラスには迷惑かもしれないけど」

「準備は揃ってる？」

「うん、完璧。オレがリーダーだから」

金村の発言でクラスが沸く。ひょうきんでお調子者。彼なら、ぼくが心配するまでもなく、このクラスは文化祭を乗り切れるだろう。「それじゃあ、1時間目はダンスの練習でいいね。ぼくも、ちょっと見せてもらいたいし」

チャイムが鳴ると、金村を中心にして行動が始まった。教室の机をすべて後ろに下げ、クラスメイト全員がダンスの体勢に並ぶ。

「それじゃあ、先生もいるから、一回通しでやってみよう」

金村の掛け声と同時に、大きな返事が返ってくる。金村はラジカセをセットして、ぼくに音楽をかけてくれと頼んだ。

「それじゃあ始めるよ」

ぼくは彼らにそう言うと、ラジカセの再生ボタンを押した。マイケルジャクソンの「スリラー」だった。

音楽が始まると同時に、教室の空気が少し緊張した。36人がいつせいにリズムよく動きだし、波のように押しては返す。ウエストサイド物語のように脚を大きく上げたり、肩をリズムに乗せてゆすったり、創作ダンスにしてはかなり完成度が高いし、限りなく原本のダンスに近い。「スリラー」のポロモーシヨンビデオが思い出された。

曲が終わり、リズムがやんだ。ほぼ間違いもなく、完璧だった。しかし、彼らは不服なのか、それぞれに曖昧な表情を浮かべていた。ぼくは感動し、立ち上がって拍手を送った。

「すごい、すごいよ、みんな!! 自分たちで作ったんだよね?」
金村は息を荒げながら、小さく笑った。

「うん。すごいでしょ?」

「本当に金村のおかげだ。よく頑張ってるよ」

すると、彼は意外そうな表情を浮かべた。金村だけじゃなく、よく見れば生徒たち全員、同じような表情を浮かべていた。

「どうしたの? 先生、何か悪いこと言ったかな?」

探り探り尋ねてみると、金村は大きく首を振った。

「違う……驚いただけ。先生、もうオレたちの顔と名前を覚えてるんだ」

「え……?」

「すごいよ!! まだ2日目なのに、先生すごいよ!!」

意外な答えで嬉しかった。小テスト10点満点を取ったような、そんな気分だ。ぼくは気分が高揚し、気がつけば彼らの中央にいた。「きみたちのダンス、本当に感動したよ。これだけできてたら、きっと文化祭もうまくいく。油断しないように、これからも練習がんばろう!!」

生徒たちは拍手でぼくを歓迎する。それもまた、気分がいい。

「ぼくは、きみたちを応援したいと思う。何かあったら、何でもぼくに話してほしい。ぼくを37人目のクラスメイトだと思って、きみたちと一緒にがんばります!!」

彼らの気分も最高潮のようだ。ぼくへの歓迎は盛大だった。

イエーイ、と大きな声で騒いだり、大きな拍手を送ったりする。

彼らの輪の中心にいと、何でもできるような気がした。

「先生サイコー!!」

気分が高まっているぼくは、彼らの異常な歓迎を快く受け入れていた。

生徒の中に、ブレザーの制服とは明らかに違う、詰襟の真っ黒な制服が浮かび上がってきた。ぼくの通っていた中学校の制服だ。ぼくはその姿を見た瞬間、高揚していた体が一瞬にして凍りついた。

大澤だ。

大澤は生徒に囲まれたぼくをじっと見つめて、何かを呟いている。ぼくを追い回す亡霊は、ぼくに何を伝えようとしているのか。彼の言いたいこととは何だ。

大澤が死んだあと、かつてのぼくらのクラスは36人になった。ちょうど、春本佳織が殺されたあとの2年4組と一緒にだった。

第2章 わたしの絵本 1

わたしは今まで、何もない単調な生活を送っていた。昔からそういう生活が好きだったし、特別なドラマを求めているわけでもない。朝になれば嫌々目覚まし時計のベルを止めて、少し急ぎながら学校の準備をする。朝食はどちらかというと食パンのほうがいい。みんながやっている朝シャンを始めたのは、中学1年生の2学期から。タイミングを外すこともなく、いっぱしの女子中学生を演じきっているつもりだ。

昔から人に合わせるが多かった。輪の内にいる女の子の気持ちを考え、言いたいことを自粛することもよくある。わたし自身、それがおかしい気遣いだという感覚もなく、ただの優しさだと思っていた。あえて自分の意見を貫きとおし、友達の間で波風を起こすことは馬鹿げている。それなら大して興味の無い話題を、うんうんと調子よく聞いている方がよっぽど利口だと思う。そう考えているのは、きつとわたしだけじゃない。むしろ、こういう考えを持った人がほとんどなのではないか。

わたしの趣味は、こうやって文章を書くことだ。自分の考えたことや、感じたことをこうやって書き連ねるだけ。地味な趣味で、よく考えれば趣味というのもおかしい。しかし、こうやって文章を書き続けてもう3年になる。わたしの感情や考えをこうして書き出し、わたしは自分の机に鍵をかけてしまっている。決して他人には見せない、自分の心の穴を、こうやって自分で整理しているのだ。こういった儀式のような行為を、図々しい他人に干渉されることだけは許せない。わたしはわたしを理解するために、変だとは思いますが、こうやって自分を記録しているのだ。

そんなわたしにとっての苦痛は、毎年恒例のクラス替えだ。今まで慣れ親しんだ友人たちと別れ、新たな他人とともに一年間、家族

よりも多くの時間を共有する。それがいかに大きな行事であるか、先生たちは残念ながら無知だ。4月の始業式、わたしはいつも逃げ出したくなる。この一年間を無事に乗り切れるのか。誰にも嫌われずに過ごしていけるのか。わたしにとってのクラス替え、進級は、とても胃の痛くなる行事だった。

しかし、今年のクラス替えは違った。2年4組、彼と同じクラスになれたからだ。1年生のときから憧れ、遠くですつと見つめていた。

笹部くんは、わたしのことをどう思っているのだろうか。こんな平凡で面白味のない女を、彼は好きになってくれるのだろうか。

文化祭が近づいていた。もともと、ダンスをしようと言いだしたのは、金田くんと、クラス委員の水川さんだ。2人とも元気で明るく、クラスをまとめるリーダー的存在だった。わたしとは違い、彼らはいつも輪の中心にいる。そしてわたしは、その輪の中に紛れ込み、ただ愛想笑いを浮かべているだけだった。2人の機嫌を取っていれば、クラスで浮くこともないし、平和に過ごせることは約束されていた。だからわたしは、人並みにできないダンスが文化祭の出し物に決まった時も、何一つ意見することはなかった。

わたしの母親の話をしよう。

わたしの母親は、ひと世代前に活躍した、あまり名が知られていない女優だった。一流ではない。かといって、二流でもない。三流女優とでも言おうか、それほど人気もなかったのだ、今や普通に近所のスーパーへ出かけても気づかれることはほとんどない。

花園レオナ。失礼だが、芸名が三流っぽい。母は、外見だけなら超一流の女優というほど美しいのだが、残念なことに芝居が下手だったらしい。彼女が三流女優となったのは、外見に追いつかない演技の技量が問題だったのだ。

そんな母は、26歳のころに父と出会い、さつさと結婚して芸能

界を引退した。医者の父に惹かれたのか、交際から3カ月の電撃結婚だったらしい。

結婚後は念願のマイホームを10年のローンで購入。夢だった東京郊外での閑静な生活を手に入れたのだ。

美人できれいな母。わたしはそんな母があまり好きではなかった。小さいころから、ささいなことでよく叱られたことを覚えている。

服を汚せば正座で何時間でもお説教。母の言いなりで小学校の児童会長に立候補し、案の定落選して数時間に及ぶ反省会。

美人で昔からちやほやされ、三流ながらテレビドラマや映画にも出演したことのある彼女は、とてもプライドが高かったのだ。自分はもちろん、娘のわたしでさえ、日の当たるところに置いていなければ気が済まない。スポットライトに照らされ、華やかである生活をアピールしたいのだ。

昔からわたしは、そんな母の自尊心を埋めるための道具でしかない、と分かっていた。母とは違い、わたしは父に似て美人ではない。垂れた目や、お団子のような鼻はコンプレックスの塊。先ほどから示しているとおり、平凡を好む地味な性格。母の自尊心を埋める道具としては、あまりに不出来だった。

母のつまらない虚栄心を満たすために、わたしは10歳のころ、子役育成スクールに週5回で通わされていた。こうして基礎からの演技を教え込ませ、自分の叶えられなかった女優としての人生の成功を、こうしてわたしになすりつけているのだ。放課後は友達とも遊べないし、好きなアニメも見られない。小さなビルの一室で、何者かも分からない演技指導の講師を中心に、短い芝居を延々と練習する。それはまるで、おままごとだ。わたしにとっての娯楽をすべて取り去った、苦痛でしかないおままごとだった。

彼女のそういった行動が、わたしの平凡への執着を一層大きくした。わたしは日陰で、のんびり暮らしたいだけ。べつに目立ちたいとも思わないし、特別な仕事に就こうとも思わない。定時に帰り、たまに残業する、そんな仕事に就きたい。

しかし母は、そういったわたしの願いを聞き入れようとはしない。あなたはわたしの娘よ。もっと華やかで、きれいでいなきゃダメなの。

小学校5年生だったわたしに、メイクの仕方を教える母を、やはり正常な母親だとは思えなかった。

今になって思うが、ずいぶん前に母と父の間の夫婦愛は崩れてしまったようだ。あのような母に父がついていけるとも思えない。もともと、ルックスだけでいえば、母と父は全く釣り合っていないのだ。そんな父を、母は道具として認めないのは当たり前だった。医者と言っ肩書と、目の前にある金と、母は結婚したのだ。そんな母が、3年前から父が不倫していることに気付いているのかは分からないが。

わたしは両親を心から軽蔑している。

わたしの夢はこうだ。母のような人生を送りたくない。

そろそろ、わたしと母の自己紹介は終わりにして、本題に入りたいと思う。

あの事件から、もうすぐで3週間になるだろうか。この3週間はいろいろな意味で、とても速く感じられた。事件当日が、昨日のことのように回想される。あの日からわたしは、大きな嘘をついたまま、こうしてのうのうとした顔で生きてきたのだ。

まったくお腹が大きくないのに、産休と言って学校から逃げ出した担任教師がいなくなってから数日後、2年4組に激震が走った。事件のあとから騒々しい雰囲気が続いていたが、その日は何かが違っていて、わたしたちもそれを敏感に感じ取っていた。

春本佳織の母親が、学校に乗りこんできたのだ。彼女は真実を知りたいと言い張り、先生たちを無視して学校に乗りこんできた。しかし、彼女が被害者と言う立場上、先生たちも邪険に扱えず、彼女を学校に招き入れてしまったのだ。それは、学校管理の責任に負い目を感じていたからかもしれない。

佳織の母親は強引ではあったが、ひどく落ちいついていたらしい。叫びだしたり、いきなりヒステリックな声をあげたりすることもある。かたがたらしい。その精神の落ち着きが、逆に不気味だったそうだが。彼女はすでに、真実を知っていた。わたしはそう、確信している。そうでなければ、クラス全員に向かってあのようなことを言うはずがない。

「このクラスの中に、殺人犯がいます。わたしの娘を殺した殺人犯です。さあ、みなさん。犯人捜しを始めましょう」

佳織の母親は、この言葉に渾身の憎悪をこめたに違いない。この言葉は、彼女が仕掛けた復讐の始まりだ。

こうして、わたしのクラスで犯人捜しが始まった。春本佳織を殺した犯人を捜し出し、彼女の母親のためにわたしたちが制裁を下す。そう言ったのは、4組のクラス会長である水川さんだった。

彼女が犯人と決めたのは、わたしが淡い恋心を抱いている、笹部くん。

わたしの平凡な毎日は、こうして音を立てて崩れていく。

ある日、連絡網の中心となっている水川さんからメールが来た。彼女はクラスメイト全員に一斉送信していたようだ。

『犯人分かった！！ 春本佳織を殺したのは笹部だ！！』

どうして彼女が、笹部くんを犯人として糾弾したのかは分からない。絵文字だらけのメールの文面からは、彼女の真意がまるで読み取れなかった。もともと、わたしと水川さんにはそれほど接点はなかったのだが、彼女の噂はよく耳にしていた。成績は常にトップ。クラス会長だし、明るくて活発。いつもみんなの中心にいる、わたしとは正反対の存在。したがって、わたしと彼女が交わることなどあり得なかった。

しかし、わたしは水川さんのことが分かるような気がしたのだ。いつもみんなの中心で、スポットライトは自分が占領していたい。会話の中心にいないければ気が済まず、プライドもやけに高い。まるで、わたしの母親を鏡に映したような存在だ。

だからわたしは、水川さんが好きじゃなかった。おそらく、母がそうであるように、彼女もわたしのことをよく思っていないかっただろう。すべて均等に気を遣い、嫌われまいと必死になっている自分が、急にバカらしくなってきた。リーダー格の女の子に嫌われれば、それはもう終わりだ。わたしはそんな不安定なことにこだわり続け、今でもその思いに縛られている。

明日からはきっと、水川さんを中心にしてクラスが動き始めるの

だろう。笹部くんを糾弾するという、そんな恐ろしいゲームだ。わたしはいつものように、そんな中で自我を押し殺し、同調するという道を選ぶのか。わたしは、恋焦がれているあの人を、みんなと一緒にになって糾弾するのか。笹部くんがわたしのことを何とも思っていないということは分かっている。彼はクラスの誰とも群れることなく、いつもひとりでいるのだから。そもそも人間に興味がないのかもしれない。笹部くんと付き合えたり、キスしたり、手を繋ぐなんてことはわたしの中の妄想にすぎない。もしかしたら、わたしは笹部くんの一匹狼な態度に憧れていたのかもしれない。誰かがいなければ不安で、誰にも嫌われたくなくて、そのために地味に生きていく。そんなわたしの生き方に嫌気が差していたから、わたしと正反対を貫き通している彼に惹かれたのかもしれない。

わたしには、やっぱりできない。

教室に入ると、真っ先に黒板に目がいった。

『殺人犯、笹部龍……!』

そうやって大きく殴り書きされ、笹部くんへの制裁の準備はとつくに整っているらしい。彼の机は派手に散らかされ、机の中に入れていた教科書には黒板と同じようなことが書かれていた。

水川さんは満足そうに笑って、笹部くんの登校を心待ちにしているようだ。彼女だけじゃない、わたし以外の全員がそんな風に見えて仕方なかった。わたしの体は、みんなと同調しようとしている。みんなの色に染まり、一緒になって笹部くんに制裁を与えようとしているのだ。けど、心がそれに追いつかない。わたしにはどうしても、みんなのように彼を傷つけることができない。体と心がバラバラになる、そんなかんじだった。

「片桐さん、聞いてる？」
かたぎり

わたしの名前を呼んだのは、水川さんだった。ひとりだけ上の空だったわたしを、みんなが不審な目で見つめていた。

「どうしたの？　もしかして、ためらってる？」

ためらうつて……笹部くんをいじめること？

制裁という行為にためらいを感じないこの人とは、わたしは一生分かり合えない、そう思った。彼女はまったくとして、当事者としての意識がない。ジャンヌダルクにでもなったように、笹部くんを晒し者にして糾弾するのだ。そうやって、自分を常に中心にしておきたい。わたしは母親を見ているようで、気持ち悪くなってきた。

「べ……べつに」

「そっか、それならいいいの。ただ、いつものご機嫌伺いがないなあって思っただけだから」

ご機嫌伺い。水川さんらしい、ストレートな発言だった。彼女がらすれば、わたしのやっていることなど、ただのご機嫌伺いだろう。だからって、彼女にわたしの何が分かるっていうのか。PTA会長のお母さんから惜しげもない愛情を与えられて、成績も優秀で友達も豊富。そんなあなたは、わたしとは違う。わたしみたいに、必死になつてご機嫌伺いをする気持ちなんて、あなたには一生わからない。わたしとあなたは、生まれた環境から本質そのものまでまったく違うの。何がご機嫌伺いよ。頭がよくて、少し美人だからって、なにいい気になつてんのよ。

そんなとき、わたしの目の前にあつた教室の扉が開いた。8時15分に教室に入るわたしから遅れを取つて8時20分。笹部くんはいつも通りの時間に教室へ入った。水川さんを中心にするみんなは、クスクスと笑いながら笹部くんの表情をうかがっている。しかし、笹部くんは黒板の殴り書きに気付いていないのか、いつもと変わらない彼に、水川さんは少し驚いたような顔をして拍子抜けしていた。笹部くんはめっちゃめっちゃにされた教科書や机の落書きを見ても、何も反応を示さない。

「なによ、あいつ」

そんな彼を見つめて、水川さんは不気味そうにつぶやいた。わたしはまた、笹部くんに惹かれていた。制裁を受けていることにすら、

何も興味を示さない。彼は、わたしには持っていない何かを持っている。

放課後、わたしはいつものように、静かに教室を出て行った。廊下ではすでにクラスの枠から外れ、みんなはそれぞれクラブの群れを作っていた。クラブに入っていない人たちもそれぞれ集まって、一緒に帰る準備を始めている。そんな中、帰宅部のわたしは、さつさと1階の昇降口へ足を向かわせていた。わたしはこんなときに、自分には本当の友達と呼べる存在がいないということを思い知らされる。毎日をご機嫌伺いに費やし、誰にでもいい顔をしてきたのだから当然かもしれない。

通学シューズであるローファーに履きかえたとき、となりでも同じように靴を履きかえている音が聞こえた。笹部くんはひどく落書きされたローファーを持って、彼を見つめたまま固まっているわたしに気づいて顔をあげた。わたしは我に返り、慌てて目をそらした。すると、笹部くんはきれいに整った顔をわたしに近づけて、小さく笑って言った。

「オレ、人殺しだと思う？」

わたしはドキツとしながら、全力で首を横に振ったが、そんなことよりも自分の顔が赤くなっているのかどうか心配だった。すると、笹部くんはクスクスと無邪気に笑った。彼のこんな顔を初めて見た気がした。

「何がおかしいの？」

「いつもの片桐なら、すぐに頷くと思った。けど、そんなに一生懸命否定したから……なんかおかしくって」

「いくらわたしでも、すぐにあんなこと信じられないよ。笹部くんが、佳織を殺したなんて」

笹部くんは手に持っていたローファーを地面に置いて、わたしの手をそっと握った。わたしの心拍数は最大だ。

「ありがとう。オレのこと、信じてくれるんだ」

彼の笑顔はとても愛らしくて、わたしを一瞬のうちに温かな気持ちにしてくれた。やはりわたしには、彼を制裁し、傷つけることなどできない。しかし、わたしはこのとき初めて、笹部くんを糾弾した水川さんに感謝をした。こうして、笹部くんと話すことができたからだ。

笹部くんの歩くスピードはとても速くて、わたしはついていくのに必死だった。すると、彼はわたしの息があがっていることに気がついて、歩くスピードを遅くした。

「ごめん、速かった？」

「うん。笹部くん、歩くの速いよ……疲れちゃった」

わたしは、こうして笹部くんと歩いていることが夢のようで、少しでも彼に甘えてみた。べつに疲れていたわけではない。疲れたふりだ。こうした小芝居は、わけのわからない劇団のレッスンを受けていたから得意だった。

「オレの部屋でちょっと休む？　ここからすぐなんだけど」

「部屋？　笹部くんの家ってこと？」

彼は首を横に振り、少し表情を曇らせた。

「違う。オレだけの部屋だよ。誰も来ない」

よく意味が分からなかったけど、わたしはせっかくだから彼のことを知りたいと思って、ついていくことにした。少しでも笹部くんのことを知りたかったし、少しでも彼と一緒にいたかった。家に帰っても軽蔑している両親に挟まれるだけだし、どうせならこうやって笹部くんと一緒にいたい。手を握られたのなんて、幼稚園の遠足以来かもしれない。ドキドキしている自分が、なんだか恥ずかしかった。

笹部くんの部屋は大きなマンションの一室で、一人で使うにはあまりにも大きすぎる部屋だった。彼の家庭事情をいろいろ探索するつもりはないが、わたしの家庭よりも複雑な事情を抱えているとい

うことは安易に理解できた。笹部くんは頑丈そうな部屋の扉を開き、わたしを部屋の中に招き入れてくれた。

わたしが中に入ることをためらっていると、笹部くんは不思議そうな顔をして首をかしげた。

「どうしたの？ 親なんていないから大丈夫だって」

「わたしが入っていいの？」

「何言ってるんだよ。片桐ともっと話したかったから、こっやってオレの部屋に誘ったんだけど……嫌だった？」

「違うの。どうして、わたしなのかなって思ってた……」

すると、笹部くんはうつすらと笑った。

「片桐が何考えてるのか、知りたくなっただ」

笹部くんがわたしに興味を持った。そんなことがあり得るのだろうか。わたしが思うに、彼がもっとも嫌いとする人間がわたしだった。誰にでもいい顔をして、誰にも嫌われたくない。わたしのように脆弱で卑怯な人間、彼が興味を持つはずもない。そう思っていたけど、今日の前にいる彼は、たしかにわたしに興味を持っているように見えた。

「わたしを……知りたい？」

そんなことをまさか、笹部くんから言われるなんて。

今日はどうかしてる。

笹部くんの部屋は、驚くほど何もなかった。テレビすらなくて、あるのはパソコンとオーディオコンポだけ。もちろん、来客用のソファや、豪華なテーブルなどもない。物が無さすぎて、逆に足の踏み場に困る部屋だった。

笹部くんはオーディオコンポの電源を入れて、再生ボタンを押した。彼が普段、どんな曲を聞くのか想像もつかなかった。スピーカーから流れてきたのは、静かなヴァイオリンの音。何かのクラシック音楽だ。音楽の成績が2のわたしには、まったく分からないことだった。

「片桐はクラシックとか聞かないよな？」

わたしの考えていることがすべて見透かされているような気がして、少し怖くなった。笹部くんには、わたしのすべてが見えているのか。いや、見えていないからこうして一緒の空間を共有しているのだ。

「わたし、そういうのには疎いんだ」

「オレも、べつに好きってわけじゃないんだ。この曲、母親がずっと聞いてた曲だから、なんか耳につくっていうか……」

モーリス・ラヴェル作曲、マ・メール・ロワ第五楽章「妖精の園」という曲。笹部くんが何も分らないわたしに教えてくれた。眠れる森の美女をモチーフにした曲で、美女が目覚ます場面を表現しているらしい。

「母親に読んでもらった絵本で一番覚えてる。王子にキスされた美女が、100年の眠りの魔法から覚める。子どものころから変な話だなあって、ずっと思ってた」

「変な話？」

「そう。だって、その前後の話を知らない美女からしたら、目覚めたらいきなり王子にキスされてるって状況だよ。いくら王子がイケメンだったとしても、叫び声の一つや二つ上げたくなると思わない？」

もともと変な人だと思っていただけ、笹部くんはわたしが思っている以上に掴みどころがなく、そんな奇妙な魅力にわたしは惹かれていることに気がつかなかった。

「たしかに……言われてみたらそうかも」

誰も思いもしないようなことを、彼は当然のように思いつくらしい。やっぱり、この人はわたしとは違う。彼はきつと、選ばれた人間なのだ。だから、凡人のわたしたちと群れることを嫌い、いつもひとりで考え事をしているのだ。

「だいたい、絵本では王子がイケメンだってことも書かれてなかった。美女が好きになったのが王子で、勝手にイケメンだって想像し

てるだけ。もし、美女の趣味が悪くて、王子がとんでもなく醜かったら、この話はロマンチックのかけらもない、ただの変態の話だよ」
この人、すごい。笹部くんの考えていることがおもしろくて、わたしは思わず笑ってしまった。

「え？ オレ、なんか変なこと言った？」

わたしは笑いながら、真剣な目をしている彼に返事を送る。

「違うの。笹部くんの考えてることがおもしろくて……すごいね、笹部くん」

そう言ったわたしも、彼と同じようなことを考えたことはあった。周りの女の子が泣けるといって貸してくれた映画を見ても、主人公が美男美女だから感動できるだけ、と余計な冷めた感覚が邪魔をして、映画に感動することができなかった。結局、美しい話には、美しい役者が必要なのである。わたしのように平凡で、とくに美人でもない女は、そういった美しい物語に参加することはできず、ましてや主人公になどなれるわけがないのだ。

「美しい物語には、美しい役者が必要なんだ」

彼の言葉に、わたしはドキツとした。わたしが笹部くんと同じことを考えていたのだ。なんだか少し、彼と近付けたような気がした。
「わたしも、そう思う」

「よかった、分かってくれて」

分かってくれて……そう言った彼を、わたしは不思議に思った。あなたは違う。わたしとは違う。わたしと違って、あなたはきれいな顔をしているから。あなたが美男でも、わたしは美女ではない。だから、わたしとあなたの間では美しい物語は生まれない。わたしが主人公だなんて、おこがましい。

「わたしは……絵本が嫌い。『眠れる森の美女』も、『シンデレラ』も、『白雪姫』も嫌い。あんなのに憧れても、きつと後悔するだけだもん。主人公になれないわたしが、バカみたいな夢を見るだけなの」

今日初めて話したのに、笹部くんには何でも言えそうな気がした。

わたしの心の中の膿を、あますことなくさらけ出せるような、そんな気分だ。

「だって、わたしには……わたしがいないから」

「片桐……？」

笹部くんは心配そうにわたしの顔を覗き込んだ。わたしは自分の顔を見られたくなくて、彼から顔を反らせた。

「いつも、みんなの話を聞くだけ。わたしから話すことなんてなかった。お昼休みも、10分休みも、みんなの輪の中で笑ってあいづちを打ってるだけなの。わたしは、誰とも話せてなかった。みんなに嫌われたくないし、わたしには何の才能もないから、下手に出しやばらないで静かにいようって、そう決めてるの。水川さんの言うとおり、わたしはいつも、誰かのご機嫌伺いに必死。あんな母親だけど、母親に似ればもうちょっとだけ自分に自信が持てたんだろうけど、それも無理」

一番聞かれたくないことを、一番聞かれたくない相手に言ってしまったている自分がとても滑稽だった。あれだけ憧れて、いつも見つめているだけだった笹部くん。わたしの本音を聞いて、どう考えているのだろう。彼は本当に無表情で、黙ってわたしのことを見つめている。くつきりとした二重まぶたの瞳。それが放つ光がわたしを映し出して、彼はわたしをどう思っているのか、まったく想像もできなかった。

「こんなこと言うの初めてだし、もし笹部くんがわたしのこと嫌いになったらって思うと……たまらなく怖い」

ふと、今までの短い人生がよみがえり、頭の中を凱旋した。他人と同調して、自ら自分を殺してきた今までの人生。悲しくとも何ともないのに、目から涙がこぼれ落ちた。

「あれ？　なんで……？　やだ、ごめんね」

その瞬間、わたしは何かの物語の主人公になれた気がした。

笹部くんは黙ったまま、わたしの肩を掴み、力強く抱きしめてくれたのだ。そして、有無を言わず、わたしにキスをした。

何が起ったのか分からない。今、必死にそのときの状況を思い出し、こうやって文章にしようとしているのだが、その情景は霧がかかったかのように鮮明にならない。

「思ったとおり。その話聞いて、オレ、片桐のこと好きになった」
小さい頃、一度だけこんな夢を見た。その夜は母が『シンデレラ』を読んでくれて、物語がそのまま、わたしを主人公にして夢に現れたのだ。真っ白なドレスにガラスの靴。鏡を見ると、わたしの嫌いだっただそばかすがきれいに無くなっていて、透き通るような白い肌で、わたしじゃないみたいに美しかった。そして、王子様。王子様は今までに見たことがないくらいカッコよくて、美しくなっただわたしと一緒にワルツのリズムで踊ってくれた。最後は、みんなが幸せそうな顔で、わたしと王子様の結婚を祝福してくれる。

夢。そう、ただの夢だ。

その夢には程遠いかもしれないが、わたしが主人公になれた。彼に抱きしめられ、キスされたそのとき、わたしはそう感じた。

わたしを主人公にした物語が始まる。わたしがわたしを取り戻した、その瞬間に。

美しい物語？ まさか。恐ろしい物語の始まりだ。

次の日、わたしは少し早めに家を出た。昨日のあの出来事が、わたしを決定的に変えたことはたしかだ。これからのわたしは、きつとわたしでいられる。他人に同調し、自分を押し殺す人生はもういい。

その日、更にわたしを変える決定的な事件が起きた。いつも早起きの水川さんが、教室に入ろうとしたわたしに詰め寄ってきた。彼女の表情から、穏やかな話題ではないことは安易に想像できる。

「昨日、笹部と一緒に帰ったって本当？」

そうか。わたしは裏切り者だ。罪人に情けをかけ、彼と仲睦まじく話していたわたしは、じゅうぶんな裏切り者ということだ。

「うん。本当」

わたしには、そう言える力がみなぎっていた。今までのわたしとは明らかに違う。本当のわたしを見つけたのだから。

そうやって高くいられるのも今のうちだった。水川さんの怒りを買ったわたしは、彼女の腕の力に言い負かされ、教室の中へ押し込まれた。机はすべて後ろにさげられ、教室の真ん中には笹部くんが腕と足を縛られていた。

他のクラスの目を気にしたのか、彼らは教室のカーテンを閉めだした。橋田が来る前だったので、担任が逃げ出した4組には教師がいなかった。まさに無法地帯なのだ。

わたしは水川さんにしっかりと腕を掴まれ、身動きが取りづらい状態のまま、笹部くんに近付けられた。

「笹部が佳織を殺した犯人だってことは知ってるよね？」

「うん。でも、そんなどこに証拠があるの？ たしか、水川さんが勝手に言いだしたことだよね？」

笹部くんはぐったりとした表情で、わたしを見つめていた。彼をよく見ると、ぐっしょり濡れて、顔には血が滲んでいた。そのぐったりとした表情を見る限り、わたしが来る前に何度か暴行を受けていたのだろう。彼がびしょびしょなのは、おそらく教室に飾られた花瓶の水をかけられたからだろう。その証拠に、花が乱雑に散らばっている。

朝から元気な連中だ。笹部くんもきつと、わたしと同じようなことを思っているだろう。

水川さんは真っ赤になって、わたしに詰め寄った。ご機嫌伺いが特技のわたしが、こうやって女子のリーダーである自分に盾突いているのが気に食わないらしい。

「片桐さん、自分が何言ってるか分かってる？」

「うん、分かっている。佳織のお母さんがこのクラスに来た日からだよ。水川さんがジャンヌダルクみたいに旗を掲げて、いじめやすい笹部くんをいじめ始めたのって」

わたしは水川さんに押し倒され、横たわっている笹部くんの隣に追いやられた。昨日までのわたしなら、今こうなっている状態など到底理解できないと思った。周りを見渡すと、クラスメイト全員がわたしと笹部くんを取り囲み、一点にわたしたちを見つめていた。彼らはまるでショーでも見ているかのようで、その瞳からは好奇心や同情にも似た光が放たれている。

このショーを仕掛けたのは、水川さんともう一人。心から楽しそうに笑っている男子。ダンス委員の中心的人物の金村くんだ。2人が仕掛けた「制裁」という名のショー。わたしと笹部くんが、こうして主人公になっている。

「片桐、どうしちゃったの？ いつもならこっち側で黙ってるだけなのにさ」

金村くんは嫌な声で笑う。彼も水川さんと同じく、明るく活発な男子だ。クラスのムードメーカーというか、とにかく彼が話すことは必ず盛り上がる。そんな2人が、このショーを仕掛けているとい

うのだからお笑いだ。彼らもきつと、今までかぶり続けてきた仮面を取ったにすぎない。クラスのみんなだつてそうだ。こんなこと、今まで経験したことがないはずだろう。誰かを徹底的に糾弾し、自分を優位にすることが出来る。楽しいと感じて当たり前なのかもしれない。本当に楽しそうだ。

そう、彼らは誰かをいじめずにはいられないのだ。

「片桐さん、最後のチャンスあげる」

水川さんはそう言つて、無理やりわたしを立ち上がらせた。さつきから可愛らしい顔をして、なかなかの怪力だ。水川さんはわたしの顔を覗き込んで、ある物をわたしに差し出した。コックローチスプレーだ。

「あいつはゴキブリ。このクラスの害虫よ。ほら、退治して」

彼女の目は本気だった。その隣にいる金村くんは、それを面白がるように笑っている。両手足を縛られている笹部くんは、何も言わずにわたしを見つめていた。乞いもせず、わたしに助けを求めるわけでもない。いや、わたしじゃなくて、誰にも助けを求めているのだ。彼はずっと一人だったのだから。

ショーに興奮した普段は臆病な男子が、気を大きくなつたらしく、笹部くんを無作為に攻撃し始める。何も言わない笹部くんをひたすら殴り、蹴り、踏みつける。か細い彼のうめき声が、わたしの頭の中でぐるぐる回った。彼は誰にも助けを求めず、ただひたすらに殴られ、蹴られ、踏みつけられている。たとえば、春本佳織を殺した犯人が彼だとしても、あまりに残酷な仕打ちだ。

「この顔がム力つくんだよ」

金村くんは耳打ちをされた生徒は、カッターナイフを取り出して口から血を流している笹部くんに近づいた。チチチ、チチチ……。カッターナイフの刃をスライドさせる音が、不気味に静まり返った教室に響く。その生徒は、カッターナイフを笹部くんの顔に弱く押し付けた。

あなたが彼の顔をム力つくと思うのは、きっとあなたが貧相な顔

をしているから。笹部くんのきれいな顔を傷つけないのは、あなたの顔が汚いニキビでいっぱいだから。

笹部くんは恐怖におののくこともせず、黙ってその生徒のカッターナイフを受け入れていた。まるで感情がないように、虚ろなまなざしをわたしに向けている。

「なんだ、こいつ……ずっと、片桐のこと見てるよ」

「ホントだ。デキてんじゃないの」

彼の頬からうっすらと、鮮血が流れ出した。彼はやはり何も言わず、うっすらとわたしを見つめている。とつくに、彼の体力は限界なのだろう。意識が朦朧としているのが目に見えた。

「ほら、やるの？ やらないの？」

水川さんはコックローチスプレーをわたしに握らせ、抜け殻のような笹部くんを指差した。

「やらなかったら、あなたも共犯だからね」

わたしはまだ、どこかでためらっていた。今ここで、笹部くんにスプレーをかけたら、わたしはまた平凡な毎日に戻ることができるだろう。しかし、わたし自身がそれを望んでいるわけではない。やっと、わたしは変われると思っていた。

共犯……。彼と一緒になら、それも悪くない。

「あは……っはははは。あはははっ……共犯か……」

わたしが大声で笑うと、あれほど賑やかだった教室が、一瞬のうちに静まり返った。

「それも悪くないかも……」

わたしは右手に持っていたコックローチスプレーを水川さんに向けて、ためらいもなくそれを彼女のきれいな顔に噴射した。

「きゃあーっ!!」

彼女の陰惨な悲鳴が教室にこだました。抜け殻のような笹部くんも、わたしの行動に驚愕したらしく、目を大きくしてわたしを見つめていた。

スプレーが目に入ったのか、水川さんは目を押さえてのたうちま

わっている。

チャイムが鳴った。惨たらしいショーに終わりを告げる鐘だ。

みんなは目を押さえて痛がっている水川さんを放ったまま、金村くんの指示通り、後ろに下げていた机を前に送り始めた。わたしは邪魔だからといって教室の端に追いやられた笹部くんのもとへ走っていき、彼の両手足を縛っていたロープをほどいてやった。

笹部くんはふらふらしながら立ち上がり、わたしが支えてあげると、小さく笑ってつぶやいた。

「どうすんの？ あれ……」

彼が見ているのは、目を真っ赤にしてわたしを睨んでいる水川さんだった。

「さあ？ 分からない」

それから、わたしたちへの制裁がより激しくなったのは言うまでもない。

そんなある日、わたしと笹部くんは一緒に学校を休んだ。笹部くんが休もうと言いだし、わたしがそれに同調したのだ。笹部くんはわたしを例のマンションの一室に招きいれてくれた。

制裁の日から、わたしは毎日、彼の部屋へ足を運び続けた。いつも笹部くんは、わたしを抱きしめてキスをするのだ。彼にとって、わたしはどういう存在なのか未だにわからない。この部屋の謎も、未だにわからないままだ。

笹部くんはいつものように、あの曲を流し始めた。

「どうして、学校休んだの？」

「それは……片桐と、いろいろ話したかったからだよ」

そんなことを真に受けるほど、わたしはバカではないつもりだ。彼がこうしてわたしを呼び出し、話したいことがあるということは、それに対応する何かが起こったという証拠なのだ。彼はわたしにキスをしてくれるし、しっかりと抱きしめてくれることもある。しかし、彼はわたしに、何も教えてくれない。この部屋のことや、わたしをどう思っているのかも。いろいろ話したいのは、わたしのほうだ。もっと、彼のことを知りたい。

「何かあったの？ 今日の笹部くん、ちょっと変」

笹部くんは意外そうな顔をして、小さく笑った。

「この前の、眠れる森の美女の話。小さい頃、母親に話したことがあったんだ」

わたしはこのとき、少しだけ笹部くんに近付けた気がした。彼から感じる事ができなかった人間味というものを、彼の言葉から初めて感じる事ができたのだ。まるで人形のように、不気味に整っ

た顔。そんな彼もわたしと同じ、まだ14歳の中学生ということに気がついて、わたしは素晴らしい発見を見出した気持だった。

「その話をしたら、母さんにすごく怒られた。そんな歪んだ考えを持つんじゃないって。そのときは何で怒られたのか分からないけど、今なら分かる気がする」

「どうして？」

「オレの母さん、なんとなく片桐に似てる」

「わたしに？」

笹部くんのお母さんだからすごく美人なんだろうなって、勝手に想像していたから、彼の言うことがにわかには信じがたかった。

「オレの両親は、職場結婚だった。父親はもととその会社の跡継ぎだったらしくて、母さんはただの受付嬢。父さんには婚約者がいたらしいんだけど、婚約者から父さんを略奪したらしいんだ。それで、ただの受付嬢にすぎなかった母さんは社長夫人になった」

「どうして。どこが、わたしと似ているのか。笹部くんが悪い冗談を言っているように聞こえた。話を聞く限り、彼の母親はわたしとはまるっきり正反対の女性だ。わたしは婚約者のいる人と結婚しようとは思わない。むしろ、わたしではなく、水川さんのような女性ではないか。」

「どこが、わたしと似てるの？」

「オレには分かる。母さんは、本当はすごく臆病な人間なんだ」

「どこが臆病なのよ。すごく肝が据わってる」

「臆病なんだよ。もともと、母さんはいい家の育ちじゃなかった。子どものとき、金銭面ですごく不自由をしたって、何度も聞かされたよ。だから、それがすごくコンプレックスになってるらしくて、父さんと絶対に結婚しようと思ったらしい」

それでも、わたしは婚約者から略奪しようとは思わない。コンプレックスがどうかなど、わたしには全く理解できなかった。

「やっぱり、わたしとは違う。わたしには婚約者から略奪する勇気なんてないもん」

「そうかな？」

笹部くんは少し意地悪く笑った。わたしを見据えて、まるで無垢な少年のようだった。

「水川にコックローチスプレーをかけるなんて、よっぽど肝が据わってると思うけど」

「だって、あれは……」

そのとき、わたしは笹部くんの言っている意味がわかった。彼の母親がそうであるように、わたしもまた、自分へのコンプレックスに苛まれてきたのだ。彼の母親は、好きになった人の婚約者を。わたしは水川さんを。おそらく、自分へのコンプレックスを、自分とはまったく正反対の彼女たちに重ね合わせねることで、自分を変えようともがいているのだ。今になって、わたしは笹部くんの母親の気持ちを理解できるような気がした。わたしは水川さんにスプレーをかけたあの瞬間から、悩まされ続けた自分へのコンプレックスから解放されたのだから。

「そうかも……しれない」

「でも、母さんはもう、オレのことなんてなんとも思っていない」

急に笹部くんの表情が暗く、かげりを落とし始めた。

「こうやって、オレをこの部屋に追いやったんだ」

わたしと彼の母親は、たしかに似ているかもしれない。けど、これだけは違う。わたしは絶対、彼を見捨てたりしない。わたしをわたしの主人公にしてくれたのは、紛れもない彼なのだから。

「どうして、お母さんはあなたをこの部屋に追いやったの？」

「好きな人ができたからだよ。3年くらい前から」

「それって……不倫ってこと？」

笹部くんは黙ってうなずく。そして、うつすらと笑いながら、わたしに一枚の写真を手渡した。

「花園レオナっていう女優、知ってる？ その人の旦那と不倫してるって、自慢してた」

わたしは彼から手渡された写真を見つめ、愕然とした。そこには

すらつとした女性と、平凡という言葉が似合いすぎるわたしの父親が一緒に手を組み、ホテルへ入っている瞬間がおさめられていた。

「驚いた？　これって、片桐の父親だよな？」

愕然とし、何も言えないでいるわたしと違い、笹部くんはとても気丈そうに見えた。笹部くんは震えているわたしの手を握って、優しく微笑みかけてくれた。

「片桐、この前言ったよな。オレと共犯でも、悪くないって」

わたしは彼が何を言いたいのか、すぐに理解することができた。

わたしも、その衝撃の中で同じことを思っていたからだ。

「本当に、共犯になってくれないか？」

こうして、わたしと笹部くんは本当の共犯者となったのだ。

その日、家に帰ると、母にこっぴどく叱られた。学校をサボったことがバレたのだ。本当のこととも言えずに黙っていると、母の怒りはさらに増したらしく、久しぶりに母に殴られた。本当のことなど言えるはずがない。あなたの夫がわたしの好きな人の母親と不倫しているのよ、なんて口が裂けても言えない。できることなら、この真実を知らないであろう母にぶちまけてやりたい気分だったが、これから始める復讐のために、楽しみをおいておくことにした。

「聞いているの！？　なんとか言いなさいよ！！　黙って学校を休むなんてつまらないこととして、わたしは有名人なのよ！！　周りの人間がどう思うか分かるでしょ！！？」

あなたはもう、自分で思っているほど有名でもないし、周囲の人間があなたに興味を持っているわけでもない。いつまで女優気分を引きずっているのか。花園レオナがすでに死んだということに、彼女は何年経っても気がつかない。わたしは半ば呆れながら、彼女の叱責を受け続けた。

「なんとか言いなさい！！」

ヒステリックなのは、誰も自分の相手をしてくれないから？

もしかして、お父さんの不倫も知っているから？

そうだとしたら、これからの楽しみが半分になってしまう。

次の日、わたしの予想通り、総長の教室ではショーの準備が整っていた。わたしと笹部くんが一緒に学校を休んだことが、今回のネタらしい。これだけ早起きなクラスも珍しいだろう。わたしは水川さんの怒りを買ったことで、クラスメイト全員を敵に回したのだ。昇降口から女子のグループに捕まり、連行されるように教室へ向かった。

この前と同じように、教室内の机はすべて後ろに追いやられ、笹部くんは教室の中心で男子生徒何名かに押さえつけられていた。もうすでに、彼は幾度もの暴行を受けていたらしく、カッターシャツには赤黒い血痕が滲んでいた。そんな笹部くんを積極的にいたづつていたのは、ダンス委員の金村くんだった。金村くんはトイレ用の汚いモップで、笹部くんの端整な顔をぐちゃぐちゃにした。

「トイレの味はいかがですか？」

金村くんは下品に笑う。

あまりにも陰惨な彼らの心の内を見て、わたしは吐き気がした。そんなわたしを快く思わなかったのか、水川さんはわたしを押し飛ばし、笹部くんがいるところに追いやった。

「昨日、学校休んで2人で何やってたの？」

水川さんがわたしたちに近づくにつれ、クラスメイト全員の輪が同じように近づき、輪は意思を持ったかのように小さく縮む。彼らは常軌を逸した目でわたしと笹部くんを見つめて、クスクスと笑う。「どうせ2人でエッチなことだろ？」

ヒューヒュー……。

いまだきヒューヒューか。

水川さんは得意げになり、声を張り上げて訴えた。

「あたしたち、カップルは応援してるのよ。ほら、ここで同じようなことしてみせてよ」

これは水川さんの復讐だった。わたしに対する最高の復讐だ。よ

つぽど、あのスプレー事件がショッキングだったらしい。

「早く、2人とも服を脱いで」

あははははっ……。

顔に似合わない彼女の下品な笑い声が合図となり、クラスメイトがわたしと笹部くんを取り囲んだ。男も女も関係ない。イジメという娯楽を楽しんでいる、狂った観客だ。

わたしはその人が男か女かわからないまま、ブレザーの制服を脱がされた。さすがに叫ぼうとしたが、誰かがティッシュを丸めて口の中に入れたから、それも無理だ。わたしはクラスメイト全員に犯されているような気がして、知らず知らずのうちに涙を流していた。

きゃー、すごい。マジでやらせる気？

わたしは理由のない涙をぬぐって、前を見た。同じように、下着だけになった笹部くんが、やはり焦点の合っていない人形のようなまなざしをわたしに向けていた。

下着だけの男女が教室の中央で見つめ合っている。お笑いのコントでもあり得ない、とんだ茶番だ。

「ほら……ラブラブしてよ」

わたしは腕を掴まれ、笹部くんの間近に連れて行かれた。彼との距離は、十数センチ。同じように、彼のきれいな唇がわたしに近づく。すると、ものすごい力で頭を押された。

きゃーっ！！ キース、キース！！ 舌も入れなさいよ。

押し付けられて、無理やり笹部くんとキスさせられた。こんな辱めが、他にあるだろうか。

それが終わると、観客は興奮した声で「次は！？」と尋ねる。

「あはははっ！！ アツイね、あんたたち」

水川さんは涙が出るほど笑っていた。すると、笹部くんはむつくりと立ち上がり、黙って服を着始めた。わたしも我に返り、急いで自分の服をかき集める。

着替えている笹部くんを見て、金村くんはそれを邪魔しようとは動

く。

「なに着替えてんの？ 次はしねえのかよ」

笹部くんは静かなまなざしで金村くんを見つめると、彼の顎を持つて、自分の唇を重ね合わせた。

教室に戦慄が走り、イヤツ、という叫び声が聞こえた。

誰もが笹部くんの行動に慄然として、息を呑んでいる。笹部くんにキスをされた金村くんは腰を抜かし、わなわなと震えていた。

「こ……こいつ……」

笹部くんはニヤリと笑い、次は水川さんに近づいた。まさか、とわたしが思った瞬間、金村くんと同じように水川さんの唇を奪った。今度は、さっきよりも大きな悲鳴があがった。

笹部くんは呆然としている水川さんと金村くん、そしてクラスメイト全員に向かって言った。

「また、片桐の服を脱がしてみる。男だろうが女だろうが、関係ない。一生、誰にも言えないようなこととしてやる」

その日以来、ショーが開催されることはなくなった。

その夜、わたしは笹部くんと一緒に待ち合わせていた。これから実行する計画を、彼は何度もわたしに説明してくれた。そこから、笹部くんの実家へ向かった。

笹部くんの実家は驚くほど大きくて、わたしは計画が成功するか心配でたまらなかった。それを見抜いた彼は、わたしを落ち着かせるために手を握ってくれた。

「大丈夫。母さんはいつも、あの部屋で片桐の父さんと会ってるんだ」

笹部くんの家は二棟に分かれていて、彼が指差したのは小さな方の棟だった。いまさらだが、ものすごい豪邸である。自分の平凡な父が、社長夫人と不倫をしているなど、今となってもまったく想像できない。ひよっとすると、2人はものすごい純愛なのかもしれないと思う。もともとがわたしと似て平凡な笹部くんの母親は、やはり平凡なわたしの父を愛したのかもしれない。

「母さんは冷え症だから、もうストーブを出してる。2人がいるのは2階の寝室。ストーブがあるのは1階のリビング。片桐の父親と密会してる時は、お手伝いさんも雇ってないんだ。父さんも出張中だし、1階には誰もいない。火災警報器も、昨日のうちに取っっておいた。完璧な事故だよ」

そう、わたしたちの計画は、火災事故に見せかけた放火。不倫中の不幸な事故で死亡。わたしの母親は、その事実を知ったとき、どのような顔をするのだろうか。ショックのあまり、もう立ち直れないかもしれない。元女優というプライドをズタズタにし、世間の晒し者として週刊誌に告発でもしてやる。

『元三流女優の花園レオナ、夫が不倫中に火災事故で死亡!!』
そんな見出しの週刊誌を見せつけて、わたしは母を笑ってやるの

だ。もう二度と、母は外出すらもできないだろう。ひよつとすると、首つりでもしてしまうかもしれない。そうすれば、ようやくわたしの復讐は完了する。わたしをコンプレックスの塊にし、無作為な期待と自分のプライドを満足させる道具として利用したこと、すべてが復讐の対象だ。そうすることで、わたしは自我を取り戻せる。

「分かった。わたしは、笹部くんを信じる」

自分のしようとしていることは、十分に理解しているつもりだ。

わたしは父親を、笹部くんは母親を殺そうとしているのだから。

父には少し悪いと思っているが、やはり自業自得であろう。平凡な男とは違った、劇的な最期ではないか。そう思うと、少しは親孝行になるだろう。

「それじゃ、行こうか」

笹部くんはわたしの手を引いて、豪邸の中へ入って行った。

小さいほうの棟と言っても、やはり豪邸であることには変わらない。玄関先には高価そうな傘立てが置いてあって、有名ブランドの靴が顔を並べている。笹部くんはとてつもないお金持ちの子どもなのだ。

笹部くんに連れられるまま、リビングに到着した。なんの皮かは分からないが、とにかく高級そうな絨毯が敷き詰められたリビングには、大型の液晶テレビがあつて、それが燃えてしまうのはとてももったいと思った。リビングの中央には、笹部くんの言うとおり、石油ストーブがあつた。

「片桐……本当にいいのか？」

笹部くんは最後に、わたしにそうやって念を押した。

「うん。もう決めたから」

わたしの力強い返事を確認した彼は、石油ストーブの火をつけ始めた。笹部くんは丸めていた新聞紙を取り出し、その火に近付ける。「この新聞紙は、すぐそこにあつたやつ。風で飛んできて、消し忘れてたストーブに燃え移って炎上。これで大丈夫かな？」

笹部くんは冗談っぽくそう言うと、小さく笑った。じりじりと、

焦げ臭いにおいが充満する。彼は火がついた新聞紙を、高級絨毯の上に投げ捨て、またわたしの手を握った。

「さあ、逃げるぞ」

わたしは小さな火が移った絨毯を見つめ、ぼんやりと考え事をしていた。母親がもし自殺したら、わたしは施設かどこかへ送られるのだろうか。親戚もいないし、天涯孤独。この世に、自分と血の繋がった人間がいらないとは、どういう感覚なのだろうか。それは孤独なのだろうか。それとも……。

「おい、片桐」

笹部くんの声で、わたしは我に返った。

「ごめん……ぼんやりしてた」

絨毯に燃え移った火は、さっきの倍以上の大きさになっていた。火の回りが早いようだ。

「早く逃げるぞ」

笹部くんはわたしを励ましてくれているのか、小さく笑って、わたしの手を引っ張ってくれた。

孤独、いや違う。わたしはこうして、笹部くと繋がっている。

わたしと彼は、手を繋いだ共犯者なのだから。

こうやって、事件の経緯を書き記してきたのだが、わたしはひとつだけ、書いていないことがある。ちなみに、今回の放火事件は、笹部くんの考え通りに事故として処理されたい。笹部くんの母親は、奇跡的に生還したようだ。

書いていないというのは、例の春本佳織の事件である。

わたしはやはり、笹部くんが犯人であるということとはあり得ないと考えている。あれは水川さんのホラで、わたしは彼女こそが疑うべき人間だと考えているのだ。それには彼女の流した噂とは違い、完璧な証拠がある。

今まで黙っていてごめんなさい。

わたしはたぶん、春本佳織の遺体を発見した第一発見者だ。

あの日は文化祭に向けた委員会の仕事が大引いて、夕方の6時頃まで学校にいた。同じく委員会の仕事をしていた水川さんも同様である。

その日は運動部が休みの日であり、発見現場となった体育倉庫はもちろん使われていなかった。わたしは校内施設の仕事を任せられ、体育倉庫の施錠をしに行ったのだ。すると、そこには青白くなり動かなくなった佳織と、同じように青白くなっている水川さんがいた。わたしは怖くなり、その場を一目散に離れたが、次の日の警察の事情聴取には嘘をついた。

これから分かるように、水川さんは自分の罪を隠ぺいするために、笹部くんを犯人として吊るしあげ、制裁したのだ。わたしには最初から、笹部くんが犯人ではないことくらい分かっていた。

明日にでもわたしは、この話を学年主任の園田先生に打ち明けようと思う。

水川さんはどうなるだろうか、楽しみだ。

それだけでは足りないような気がするから、笹部くんが犯人だという噂を広めた、便利な学校裏サイトにでも書き込もうと思う。そうすると、彼女も終わりだろう。

こうして文章を書くことで、心の平穏を保ってきたわけだが、明日からはその必要もなさそうだ。明日から、わたしはわたしになれるのだから。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9536k/>

36人の共犯者

2010年10月10日10時19分発行